

東南アジア研究センター 昭和39年度第4・四半期報告

東南アジア研究センターの昭和39年度第4期・四半期の諸活動を要約報告する。

まず、この四半期では、**調査研究計画**が積極的に展開された。すなわち、中核調査として、タイでの飯島・水野・矢野3氏によるそれぞれの村落定着調査はいちじるしく進んだし、マラヤ・プロジェクト・リーダーの棚瀬博士を惜しくも失ったアロール・ジャングスの定着調査は、口羽竜谷大学講師の引揚げたあと、築島東大講師と、マレーシア大学の休暇を利用しての留学生前田君によって守られている。前期の後半から今期にかけ、個別調査のうちの人文・社会科学部門では、言語班の泉井教授（文）、宗教班の藤本関西大学教授、政治班の猪木・福島両教授、香西・清永・高坂の3助教授（法）、華僑班の日比野助教授・船越助手（人文）・中村天理大学教授および藤原京都女子大学教授がそれぞれ現地調査に赴いた。自然科学部門では、土壤班の川口教授・久馬助手および大学院学生古川君、生物班の吉井教授(教養)・田川助教授(理)、水利班の松尾教授（工）・富士岡教授・南助教授（農）が、おのおの現地調査に従事した。これら調査は帰国後ちくじ研究例会で報告されている。**バンコク連絡事務所**は本岡助教授が責任者になっている。

養成計画としては、タイ・マレーシア・アメリカで5人の留学生がひきつづき研究中のほか、来年度留学生3君が選抜されたし、インドネシア語の講義も開かれた。**交流計画**としては、バジェリー教授の講義が好評を博しているし、数名の著名な外人学者の来訪をみたほか、わたくしが HRAF 年次総会出席とアジア学会での講演のため3月渡米した。**図書計画**は、HRAF の整備がいよいよ終りに近づき、この5月をもって公開される予定である。**出版計画**も予定どおりはこび、本年度内で「東南アジア研究」が5冊刊行された。

なお、**募金事業**は京都大学東南アジア研究センター後援会の手によって鋭意すすめられ、広く財界の好意のもとに、この3月末をもってほぼ予定額が達成されうる見込みである。最後に、懸案の**官制化**については、幸いに関係各位の支持のもとに、去る12月末の昭和40年度予算案内示において、京都大学東南アジア研究施設の設置が認められた。当初は1部門ではあるが、わが国大学ではじめての総合的地域研究の施設であり、またはじめての大学共通施設であって、この官制化のもつ意義はきわめて大きい。

いま、東南アジア研究第1期5カ年計画のうちの第2年度を終わるにあたって、現地調査研究をはじめとする諸計画が順調にすすみ、また募金ならびに官制化が好調にはかどったことを、心から嬉しく思う。これひとえに各位の後援のおかげである。深甚な謝意を表するとともに、いっそうの努力を誓うしだいである。

昭和40年3月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍